

2022

令和4年12月10日発行（毎月1回10日発行） 通巻352号

人生100年時代 共生社会の生き方情報誌

とあまおう



さわやか福祉財団

いきがい・助け合いサミット in 東京

『助け合い大全'22』

9月1日・2日に開催した東京サミットの結果と振り返りをまとめた、『いきがい・助け合いサミット in 東京 助け合い大全'22 提言編』が完成しました。

サミットでの全体シンポジウムと各分科会における発言要旨をまとめた『パネル編』、ポスター展の出展全作品を収録した『ポスター編』、そして提言編を3冊セットで頒布します。

地域共生社会づくりに、ぜひお役立てください！

【助け合い大全'22 提言編 目次】

- 私たちはどこに向かおうとしているのか
～サミット提言の骨太な総括～
- 全体シンポジウム発言要旨
- 分科会1～37 提言／登壇者／議事要旨
- ポスター展
- 「いきがい・助け合いサミット in 東京」
を振り返って

お申し込みは当財団まで

→電話 (03) 5470-7751

1セット2,000円(税込・送料別)

※3冊セットのみでの頒布となります。

提言編



パネル編



ポスター編



東京サミットの全体シンポジウム・全体発表会の動画と、ポスター全作品を公開中！

財団ホームページ内の東京サミット特設ページから、どなたでもご覧いただけます。

ぜひご活用ください ➡ <https://summit.sawayakazaidan.or.jp>

さあ、言おう

2022年12月号

CONTENTS

2 新しいふれあい社会 実現への道

若者の挑戦を応援して地域参加を進める

清水 肇子

4 広げよう つなげよう 地域助け合い 活動の現場から

住民主体の移動・外出支援を創出 「やればできる!」を実感

東和苑ささえ愛会（奈良県葛城市）

11「地域助け合い基金」助成先のご紹介／状況のご報告

16 連載 23 老いの暮らしを創る

分厚い封書 福祉ジャーナリスト 村田 幸子

18 連載 人生100年時代を生き抜く知恵 ジェンダーの視点から 4

老人問題は女性の老後問題 お茶の水女子大学名誉教授 袖井 孝子

新しいふれあい社会づくりに向けて

● 新地域支援事業・ 助け合いの地域づくり

22 北から南から 各地の動き

● その他の財団の活動 など

32 ご支援ありがとうございます。

さわやかパートナー（賛助会員）・ご寄付者の皆様のご紹介

33 活動日記（抄）

㊦『さあ、やろう』vol.20のご紹介

㊦寄付のご案内

㊦みんなの広場／投稿募集

㊦さわやかパートナー・『さあ、言おう』のご案内／表紙絵から

助け合いを広げよう！ 新・ひとりごと ● 小野 晶子

若者の挑戦を応援して 地域参加を進める

さわやか福祉財団 理事長 清水 肇子

何らかの障がいや病気があっても、体に衰えがあっても、自分を生かして社会にいきいきと参加する。超高齢社会を迎えて、シニア世代の多様な社会参加が大きな課題といわれているが、そんな中で、これまで社会の中で消極的に暮らさざるを得なかった若者たちが、自分を生かそうとチャレンジを始めている取り組みが注目を浴びている。

「注文に時間がかかるカフェ」というのをご存じだろうか。クラウドファンディング（ネット上の募金）を活用して開催費用を捻出しながら、各地で1日カフェを開催している。なぜ時間がかかるのか？ そこに参加しているのは、吃音のある若者たち。人と話するのが本当は嫌いじゃない彼らが、挑戦の勇気の一步を踏み出して、夢だったカフェで接客をする。お客様側もそれを前提に、ゆっくり待って同じ時の流れを過ごす。

当事者の症状も人それぞれ、好む対応も違う。一人ひとり支援の方法は違うという当たり前のことも、ここに来れば体験で自然にわかる。自分がして欲しい対応をマスクに書いて接客する。そして自分ができないと思ってきたことの殻を破り、来店する人をにこやかに迎ええる。

若者たちの懸命な姿勢が多くの人々を引きつけるのだろう。自分も何か応援できないか。シニアの人たちを地域に引き出す出番づくりのヒントがそこにはいっぱい詰まっている。

そしてもう一つ、AIを活用したこんなカフェも反響を呼んでいる。先日、その常設実験店である東京・日本橋の“オリヒメカフェ”（分身ロボットカフェ DAWN ver.β）を訪ねてみた。こちらは、障がいや心身の病気、家庭の事情等で、外出がままならない人たちが、分身ロボットオリヒメ（OriHime）を通して、パイロットとしてカフェの接客に当たる。

接客をしてくれたお2人のうち、1人は20代女性で兵庫県在住。障がいがあり電動車イスの生活だが、大学卒業後の就職がうまく決まらない時に、このカフェとの出会いがあった。兵庫から、日本橋のカフェの接客を最新AIロボットを介して行う。ここでは決められた時間、ずっと会話を続けることができる。こちらはお客ではあるけれど、いつの間にか軽い人生相談のような話にもなり、自立して頑張る彼女への少しでもエールになればとの思いにもさせてくれた。店内では、同世代の若者たちや子連れの親子、中年男性の3人組、外国人グループと、まさに多様な人たちが、それぞれのテーブルでパイロットとにぎやかに会話をしていた。

障がいや病気のある人、認知症の高齢者などを「受け入れる」というのではなく、ITも活用しながら、その皆さんたちが主役になるような活動、地域の居場所づくりを進めることで、シニアも現役世代も出番づくりにつなげやすくなるかもしれない。引きこもりがちな人も、役割を持って自宅からまずは声からだけで参加してもらう、そこに地域の思いある若者たちも一緒に参加してもらう。そんな地域参加の働きかけ方もあるのではないか。

「誰かの役に立つことをあきらめない」（オリヒメ）、彼らのひたむきな思いは地域づくりを進める大きな光となるはずだ。

広げよう つなげよう

地域助け合い

活動の現場から



住民主体の移動・外出支援を創出 「やればできる!」を実感

東和苑ささえ愛会 とうわえん
(奈良県葛城市) かつらぎ

高齢化に伴う運転免許返納により、移動困難者が増加しています。そんな中、「東和苑ささえ愛会」では、生活支援コーディネーター（SC）のサポートを受けながら許可・登録不要の移動・外出支援（マイカーボランティア）を実現し、住民主体の有償ボランティアによる生活支援に取り組んでいます。活動創出までの経緯や活動の様子取材しました。

（取材・文／城石 眞紀子）

一人暮らし高齢者の体調急変から
安心の地域づくりをスタート

奈良県中西部に位置する葛城市。

「東和苑ささえ愛会」が活動する疋田 ひまた 東和苑地区は、その東部にある自治会の一つで約330世帯で構成されている。

同地区は、葛城市では唯一の特急が停まる近鉄線の尺土駅に隣接し、大阪へのアクセスが良いことから50年ほど前に一気に住宅が立ち並んだニュータウンだった。しかし、転入してきた世代が近いこともあり、高齢化率は38・9%（昨年10月現在）と、近年は急速に少子高齢化が進行している。

そんな東和苑地区で昨年、ある出来事が起こった。

前日まで、自転車で買い物に行くほど元気だった一人暮らし高齢者の体調が急変。朝、自宅の雨戸が閉まっている。

ることに異変を感じた隣人が、預かっていた鍵で玄関を開けたところ、倒れている本人を発見して救急搬送。数日後に亡くなったが、知らせを聞いて駆けつけた家族は、「まだ生きているうちに親に会うことができた」と、涙を流して感謝したそうだ。

孤独死を防ぐことはできたが、この一件にショックを受けた老人会の会長が「何とかしないと!」と声を上げたことから、地域の課題を話し合う場を立ち上げようと昨年6月、老人会、自治会、民生委員、同市社会福祉協議会、住民有志が集まって、「東和苑あんしん

ん会議」を結成。高齢者の緊急時に、家族の連絡先、病歴、主治医などが分かれば迅速な対応が可能になると、必要な医療情報をまとめた「あんしんキット」を導入する取り組みを始めた。

対象者は70歳以上の一人暮らし、高齢者夫婦世帯などで、民生委員が訪問して医療情報シートへの記載、キットの設置方法を確認。それと同時に、「一人暮らしだから心配、家族と同居しているから安心、というのは違う。近所付き合いがどれくらいあるかなど、暮らしぶりも把握しないと実態は分からない」との意見から、暮らしぶりや困



「あんしんキット」はどこの家にもある冷蔵庫に保管

りごとの聞き取りも行った。そして、それらの困りごとについても「放っておけない」と、有志メンバーで検討することになったのが、現在のささえ愛会の出発点だ。

「制度だけでは支えられない」 勉強を重ねて移動・外出支援

同会会長の久岡政司さん^{まさし}（70歳）に活動創出までの経緯を聞いた。

「把握した困りごとの多くは、買い物や通院など移動・交通手段についてでした。そこで、地域の移動困難者に対する移動・外出支援を行う団体をつくろうと、市社協所属のSCさんにも話し合いに加わってもらい、今年1月から立ち上げに向けて動き始めました。SCさんがケアマネジャーでもあったので、まずは公的なサービスでできることとできないことについて、詳しく教えてもらいました」

例えば、介護保険における介護タクシーは要介護1以上の認定がなければ利用できない。しかも基本的に病院の送迎のみで、「ついでに買い物」といった寄り道はダメ。介護保険の訪問介



みんなでマイカーボランティアの勉強

護による生活援助（家事代行）は原則、同居の家族がいる場合は利用できない。買物は代行のみで、本人は連れていってもらえない。趣味、嗜好品の買物は頼めない等々。

「知れば知るほど、制度だけでは高齢

者の生活を支えることはできないと実感しました。無償では気を遣って頼みにくいだろうから、有償で支援しようと考えましたが、自家用車で移送を行うといわゆる『白タク』扱いとなり、道路運送法に抵触しないかとの疑問もありました」

そこで、SCが作成した『移動・外出支援ガイドブック』を基に、制度や保険などの仕組みを勉強。家事や身辺援助と一体的に提供し、運送に対する個別の対価が生じなければ、運輸局への許可・登録も必要ないことを確認した。

「念には念を入れて、運行開始前にSCさんから運輸支局への確認も取っていただきました。また、万が一の事故やケガに備えて、自動車にかけられている任意保険に加え、福祉サービス総合補償と送迎サービス補償の2種類の保険を重ねることで、安心して利用と

活動ができるように工夫しました。さらに、保険の範囲を超えて補償を求めない旨の誓約書をいただくことにしました」

3月には、市社協が開催した「移動・外出支援を考えるための安全運転講習会」を立ち上げメンバー4人全員が受講し、運転や付き添い介助のスキルを習得。加えて、聞き取りの際に移動・外出支援以外にも要望が上がった、庭の手入れやごみ出しなどの困りごとにも解決しようと、会のメンバーで互いに「できること」を出し合って生活支援も行っていくこととし、4月1日から活動を開始した。

「道路運送法などの法律は分かりにくく、自分たちだけではとても実現できなかったと思います。でも、SCさんがいろいろ情報提供してくれたおかげで疑問や不安も解消し、スピード感をもって開始にこぎつけることができました



ワンコインのお手伝い券



マイカーボランティアによる移動・外出支援

した」と久岡さんは振り返る。

顔見知りだから安心 移動以外の困りごとにも対応

ささえ愛会では、「お互い様」「支え合い」という観点から、お手伝いしてもらう人を利用者ではなく「賛助会員」とし、手伝う人を「正会員」とする会員制の仕組みにしている。利用料

金はガソリン代などの最低限の費用、保険料などを考慮し、1回1時間以内ワンコイン（500円）に設定。「チケット制を導入していますが、金券のイメージをできるだけ消したかったので、『お手伝い券』と表記。サービスを提供する我々と利用者、お互いに飛躍してご縁が生まれることを願って、500円という数字の代わりに、

『互飛躍縁（ごひやくえん）』としました」

活動開始からの半期（4～9月）の実績は、使用チケットで79枚。内訳は7割以上が外出支援で、いわゆる運転ボランティア。病院の送迎が大半を占め、施設への面会や手続き、買い物、薬局などもあった。

「予想はしていましたが、移動のニーズの高さをあらためて実感しました」

取材当日も、新たに賛助会員になった小西艶子^{つやこ}さん（88歳）から「インフルエンザの予防接種を受けたいので病院まで連れて行ってほしい」との依頼が入った。近所に住み、民生委員でもあるメンバーの高橋周代^{かねよ}さん（65歳）を「主治医に紹介しておきたい」とのご指名だった。

「脊柱管狭窄症で足腰を悪くして、運転免許も返上。外出に不便を感じていたので本当にありがたいです。高橋さ

んのことは昔からよく知っているので
安心だし、頼りにしています」と小西
さん。

息子さんと2人暮らしの日中独居。
元看護師で認知症キャラバンメイトと
しても活動してきただけに、「今の自
分が情けない」とも話されたが、「地
域のために長年頑張ってこられた方な
ので恩返しをしたい」と優しく接する
高橋さんの姿が印象的だった。

ほかにも、庭木の剪定や大工仕事、
変わったところでは「スマートフォン
の操作を教える」という依頼もあり、
いろいろな困りごとにワンコインで対
応。会員数も口コミで少しずつ増え、
現在6名の正会員と14名の賛助会員が
いる。

地域のため、自分たちの将来の ために「今」できることを

利用の申し込みは電話で受け付け、



日時や内容をメンバーのLINEグル
ープに連絡して対応を調整。スケジュ
ール管理はカレンダーアプリを使って
共有。

パソコン作業の得意な男性陣が助成
金や各種申請の書類を作成し、日曜大
工もプロ級の腕前の人がいる。武内秀
之さん（78歳）はさらに、現役時代の



活動の様子（庭木の剪定と網戸張り替え）

スキルを生かして会計業務も担当して
いる。高橋さんは民生委員を9年務め、
福祉のことや地域の実情に詳しく、こ
の人と見込んだ人を誘って新たな正会
員獲得にも貢献。その高橋さんから、
あんしんキット設置の際に声をかけら
れて立ち上げメンバーに加わった原田
一葉さん（70歳）は、「一人暮らしで、

コロナ禍以降はほとんど家に閉じこもっていたのですが、車の運転がいならできると思って参加しました。おかげで、今まで知らなかった地域の人たちと顔見知りになって、一緒に活動しているメンバーもみんないい人ばかり。このつながりには感謝しかありません」と話してくれた。

それぞれが長けた分野で自分の持ち味を発揮し、チームワークも抜群。そして住民の力を信じ、的確なサポートでそつと背中を押すSCとの連携も素晴らしいささえ愛会。久岡さんは「まだお試しの段階で自治会にも住民にも公式には活動を周知しておらず、利用者は口コミが中心。最低1年間は様子を見てから次の段階に移ろうと思っていますが、やればできる！というのが今の実感」と言い、さらに先々のことまで見据えている。

真剣に取り組む住民を支援するSC

ささえ愛会の立ち上げを支援した、
葛城市社会福祉協議会所属のSC田口研一郎さんにも話を聞きました。

私には忘れられない光景があります。

ささえ愛会の立ち上げに向けて話し合いを重ねている最中のことです。高齢のご夫婦で、足の悪い奥さんの代わりに自転車で買い物に行っていたご主人が、転倒して大ケガをして入院。奥さんは1人では家にいられず施設入所となり、2人世帯だったのが一気に離散。ささえ愛会ができたなら真っ先に利用してもらおうと思っていたのにそんなことになってしまい、「ぐずぐずしてたら高齢者はみんな施設に入所してしまう。ちゃっちゃとやらなあきませんわ」と高橋さんがおっしゃったんです。

住民が主体となり、真剣に自分たちの地域の将来を話し合う姿は本当に頼もしいです。私たちSCは、そんな皆さんの話をよく聞いて、信頼

関係をつくり、不安に思っているところや引っかかっているところをほぐすことを心がけました。その結果、「ほぐれたら前に進むしかない！」と結束力もさらに強まって、活動が創出されました。そして、顔の見える自治会の範囲で活動しているから安心感があり、地域にも浸透していく――。

こうした小さな助け合いの仕組みがあちこちで芽生えれば、トータルで見たら葛城市全体がサポートできるし、それが地域支え合いの本来あるべき姿だと私たちは考えています。高齢者が安心して暮らせる地域は、若い世代が何十年も安心して暮らせる地域でもあります。そんな助け合いのある地域づくりを、これからも全力で応援していきたいと思っています。

「まずは、一緒に活動してくれる正会員を増やす。やってくれる人は潜在的には住民の1割程度いると思っているので、少なくとも今の倍くらいの人数は確保したい。それができてはじめて、賛助会員をもっと受け入れられますからね。その上で、後継者を育成していずれは自分たちがいなくなっても活動が継続していくような体制を構築したいと考えています」

地域のため、自分たちの将来のために今から動く……。その思いこそが、安心して暮らせる地域づくりを推進する原動力となる。全国で取り沙汰されている移動の問題には、このような方法も参考になるだろう。



左から、立ち上げメンバーの久岡さん、原田さん、武内さん、高橋さんと、SCの上田公彦さん、田口さん

東和苑ささえ愛会

葛城市疋田東和苑地区で活動する、会員制の有償ボランティアグループ。高齢になっても不自由なく暮らしていけるよう、介護保険サービスや公的制度ではサポートできない「ちょっとした困りごと」を住民の特技を生かしてお手伝い。主な活動内容は、外出・通院支援、買い物の付き添い、草刈り・掃除、軽作業など。利用料金は1回500円（概ね1時間以内のお手伝い）。4枚または10枚綴りのチケットを事前購入し、活動終了後にチケットを手渡す仕組み。移動支援をした正会員には、ガソリン代20円／キロ換算で3か月ごとに実費精算、残りは運営費に充てている。

●連絡先／〒639-0273 奈良県葛城市染野789番地1

社会福祉法人葛城市社会福祉協議会

電話 0745-48-3373（生活支援コーディネーター田口・上田）

応援ありがとうございます！

「地域助け合い基金」助成先のご紹介

皆様のご寄付を原資に、さまざまな世代・人々が参加する地域共生社会への取り組みや、コロナ禍での困りごとと解決のための活動を支援している「地域助け合い基金」。今月号は、重い障がいがある人の学習の場、ショッピングセンターを活用した居場所づくりプロジェクト、有償ボランティアによる在宅生活支援を紹介します。

なお、このほかの助成先団体の活動報告も財団ホームページに随時アップしていますので、思いが詰まった多彩な活動をぜひご覧ください。

岩手県一関市

おうちで、地域で、重い障がいがある人の生涯学習の場づくり

三浦かおる

助成金額 15万円

「この子たちの発達はゆっくりですから…」。重い障がいがある子たちが療育教室や学校の場で言われる言葉です。

発達が遅くなりなら学ぶ時間かもしれませんが、教育の期間だけは他の子たちと同じ。今や高校卒業者の80%を超える生徒が進学しますが、重い障がいのある子たちには特別支援学校卒業後に進学する道は用意されていません。

そこで三浦さんは、自宅や安心できる場所で本人の興味に寄り添い、個別または小集団での学習機会「おうちで授業」、獲得したスキルを発揮して地域の人たちと交じり合つての集団の学習機会「みんなde授業」を提供しようと本基金の助成に応募されました。助成金は、立ち上げの

ためのチラシ印刷費用、講師料、交通費に活用されました。

「おうち de 授業」では、学生2名、講師5名で、学生1人につき月1〜2回、自宅の訪問とコロナ拡大期間はオンラインで個別の学びの場を展開しました。学生時代に好きだった音楽や調理、読み聞かせを継続することで、子どもたちは笑顔や発声で自らを表現するようになり、社会性が育っていることに気づかせてもらったそうです。「みんな de 授業」は、地域の人たちとの集団の学習機会と考えていましたが、コロナ禍のためオンライン



「おうち de 授業」クッキングの様子



で開催したところ、全国の人たちとつながることができました。参加者からは、「お友だちが増えてうれしい」「皆さんから刺激を受けてやる気が出る」などの感想が聞かれたとのこと。今後も、重い障がいがあっても学ぶ環境をつくれる地域社会を目指すということです。

鳥取県琴浦町

誰もが生きがいを持って暮らせるように 居場所づくりのモデルを推進

まちの居場所づくりプロジェクト

助成金額 15万円

まちの居場所づくりプロジェクトは、集いの場の立ち上げや継続支援、高齢者が使いやすいサービスを冊子にまとめてケアマネジャーや民生委員等に配布するといった、これまでの「げんきもん研究会」での取り組みを発展させたプロジェクトです。居場所づくりを通して誰もが生きがいをもって暮らし続けられる地域づくりを推進しようと、琴浦町の第1層協議体が2021年に実行委員会として立ち上げました。

コロナ禍では、ショッピングセンターのベンチ撤去、交流の機会減少、自粛ムードによる高齢者の意欲低下がありました。そこで、コロナ禍でも居場所が必要であること、感染対策によって開催可能モデルとなることを含めて、同プロジェクトでは、ショッピングセンターのテナント撤退による空きスペースを活用し、健康づくりのためのウォーキングコースと交流のできる居場所を設け、地域住民の移動支援、買い物



ボランティアドライバーによる送迎の様子



居場所のパーテーション製作の様子

支援にもつながる居場所づくりのモデルを実践しています。本基金の助成金は、居場所を継続して運営するための会場使用料と、今後、映像やリモートオンライン中継を併用するためのプロジェクト等に活用していただきました。取り組みの結果、社会福祉協議会ボランティアセンターとの連携により新たなボランティア人材が見つかり、車の送迎もできるようになったほか、地元企業や郵便局長からマンパワーと物品貸し出し等の協力を得るなど、成果を実感しているとのこと。参加した人の声やアイデアを取り入れて、「居場所」が「居場所づくり体験の場」になっている、と報告をいただきました。

長崎県佐世保市

**社会福祉法人や医療法人の協力で
活動を広げる住民主体の生活支援**

生活支援有償ボランティア団体「さわやか・しかまち」

助成金額 15万円

「さわやか・しかまち」は、自分たちの住むまちを自分たちの手で住み続けられるようにしたいと、住民主体で20

21年12月に発足しました。地域における在宅生活支援の継続・自立支援を目的に、買い物や通院支援・家事支援の提供を行っています。

本基金の助成金は、地域のスーパーマーケットが廃業し買い物に不便を感じている人が多いため、買い物外出支援を行うためのサポーターの運転者講習と、鹿町福祉村（社会福祉法人・社会医療法人）から無償で貸与された10人乗りワゴン車の車体に取り付けるステッカー等に活用していただきました。

今年6月から、要支援1・2の人、一人暮らし高齢者や支援を必要としている人を対象に、毎週水曜日に自宅から目的地までの送迎と付き添い支援を実施しています。利用者からは、「自分の目で品物を選ぶことができる」「人と交流することができて楽しかった」など感謝の声が聞かれるそうです。また、歩くことが億劫だった人が1か月後に足取りも軽快に買い物を楽しんでいる様子を見て、活動を立ち上げて本当に良かったと切実に思っているとのこと。利用者アンケートの結果、満足度は100%だったそうです。



買い物支援の様子

サービスの量と質を維持しながら、提供できる人員の確保、継続した活動を維持するための経費をどのように補っていくのかなど今後の課題もありますが、地域の力を結集して生活支援の充実が図れるように組織として活動を継続していきます、と報告を寄せてくださいました。



買い物外出支援サポーター

「地域助け合い基金」 状況のご報告

皆様のご支援により全国各地の助け合い
を助成している「地域助け合い基金」。

11月15日までの状況をご報告いたします。

(11月15日 当財団ホームページ開示時点)

◎寄付受付額

214件 3146万8836円

このほかに当財団より
1億2000万円を供出

◎助成実行額

821件 1億3225万64円

コロナ禍を乗り越え、地域共生社会を実
現する活動のスタート・継続が促進されま
すよう、引き続き皆様のご支援・ご寄付を
よろしくお願い申し上げます。

(事務局長・内田)

当財団ホームページでは毎日、寄付と助成金額を開示しており、助成可能
な金額もご覧いただけます。

寄付や助成をお考えの方は参考にしてください。



クレジットカード
決済ページ



財団ホームページ内
基金関連ページ

●基金に関する情報、
およびクレジットカード
決済は、
QRコードもご利
用ください！

基金に関するご意見・お問い合わせ

<地域助け合い基金担当>

電話：(03) 5470-7751 FAX：(03) 5470-7755

メール：tasukeai-kikin@sawayakazaidan.or.jp

老いの暮らしを創る

分厚い封書

福祉ジャーナリスト 村田 幸子

ホームに入居した時友人がお祝いに

送ってくれたレモンの樹が実をつけ、

12月を迎えた今、まるでキンカンの様

な大きさと色づきになってきました。レモン

の成長振りと、部屋の前の色づいた木々を眺

めては、家の片付け、引っ越しに明け暮れた

この1年を振り返ることが多くなりました。

入居して3カ月ほどたった8月末、私はや

っとお知らせすべき所に転居通知を出すこと

ができました。終の棲み家として何故有料老

人ホームを選んだのか、その私の気持ちも含

めて、近況を少し書いておきました。これま

での経験ですと、転居通知に関してはそれほ

どの返信はなく、あっても通り一遍の内容で

したが、それがまあ。

何とお返事の多かったことでしょうか。し

かも封書の。手紙に限らずメールや電話のご

連絡もありました。呆氣にとられたのは、お

酒は飲めるのですか、外出はできるのですか、

という質問です。極めつけは「お寂しいでし

ようが、すぐ慣れますよ」というもの。

エッ、寂しい？

まさかこんな反応があるとは考えてもみま

せんでしたが、まだまだ施設に対する偏見と

は言わないまでも、固定観念があるのでね。

施設は要介護になってから入居するだけでな

く、元気な時の老いの住まいの選択肢の一つ

でもある、という認識が広まるにはいまだ少





時間がかかるのかもしれませんが。

でもほとんどの方は、私が余力のあるうちに住まい方をコンパクトにし、新たな暮らしに踏み出したことを喜んでくれていました。そして我が身を振り返って「今は元気だが、いずれ一人になる。今後どうすればよいのか決めかねる」「毎年のように年初に断捨離の決意をするが、今年もダメだった」等というのが多く、「老いの暮らしをどうするかは今、自分にとって切実な問題。一度経験を含めて話を聞かせてほしい」という便りもありました。

何より嬉しかったのは皆、自分の近況を楽しげに書き加えてくれていたことです。

太極拳のサークルを立ち上げ、地域住民と共に毎朝楽しんでる。昔の仲間と政治、経済の勉強会をしている。畑で四季折々の野菜をつくっており、今年挑戦した新しい野菜の収穫が待ち遠しいなど、ワクワクするような

内容我便箋6枚にも綴ってくれた人もいました。

分厚い封書を何度も読み返しては笑ったり涙したり。友人・知人の来し方、今、そしてこれからが、思い浮かんできました。それはまた、私自身のことにも重なります。拙い字でも、なぐり書きでも、誤字・脱字があっても、手書きの文面からは、その人の声まで聞こえてきます。たくさんの方の封書を読みながら、若い頃好きだった人にしたラブレターに対し、その人が「貴女の手紙には誤字が5つもあった」という返事をくれたことまで思い出してしまいました。

年に1回でも、数年に1回であっても、お互いの近況や思うことを綴りあおう。断捨離流行りではありますが、人との関係だけは絶ちたくないと、たくさん頂戴した返信を読み返しては思い出の世界を広げ、新しい年への夢を膨らませています。



(むらた さちこ) 立教大学英米文学科卒業後、NHKにアナウンサーとして入局。報道番組のリポーターや社会性のある硬派の番組を中心に担当。1990年、解説委員に就任。NHKスペシャル「あなたが寝たきりになった時」、NHKモーニングワイド「高齢化社会」のキャスター他、多くの番組を担当。2004年、解説委員を退職後も高齢者問題の第一人者として活躍中。

人生 100年時代を 生き抜く知恵

ジェンダーの
視点から

4

老人問題は 女性の老後問題

お茶の水女子大学名誉教授 袖井 孝子



(そでい たかこ)

お茶の水女子大学名誉教授、東京家政学院大学客員教授、一般社団法人シニア社会学会会長、一般社団法人コミュニケーションネットワーク協会会長、NPO法人高齢社会をよくする女性の会副理事長。専門は老年学、家族社会学、女性学。主な著書に『変わる家族 変わらない絆』『高齢者は社会的弱者なのか』（以上ミネルヴァ書房）、『女の活路 男の末路』（中央法規）、など多数。

私が副理事長を務めるNPO法人高齢社会をよ

くする女性の会（旧高齢化社会をよくする女性の会）が発足して40年になる。会は、1982年9月に東京で開催された「第1回 女性による老人問題シンポジウム」を契機として、その翌年に結成された。

総人口に占める65歳以上人口の比率が7%を超え、日本が高齢化社会入りをした70年以降、貧困、寝たきり、孤独などのいわゆる老人問題が脚光をあびつつあったが、老後に直面する問題に、男女

で違いがあることは等閑視されてきた。

シンポジウムにおいて、もっとも盛り上がったのが介護問題。会場からは、競って介護の苦勞話が語られ、それまで女性たちが背負ってきたものの重さに圧倒された。80年代初頭、高齢者の過半数は三世帯世帯に暮らしていたので、介護は当然、嫁の役割だった。外部サービスも親族からの支援もなく、ひとりで介護を引き受けてきた嫁を「介護地獄から救う」ことが、会の立ち上げをうながし、後に介護保険創設の後押しをしたといっても

過言ではない。

もう一つの大きな問題は、高齢女性の貧困。洋の東西を問わず、貧困層の中核をなすのは、ひとり暮らしの高齢女性だ。産業革命以降、どの社会においても、男性は家庭の外で働き、女性は家庭を守るという性別役割分業が確立した。たとえ女性が無職であっても、それは家計を補助する程度であり、主たる役割は家事育児、そして介護ということになる。

共働き世帯が片働き世帯を上回る今日でも、雇用制度や社会保障制度は、男性世帯主が稼ぎ、妻は夫に養われることを前提にしている。「女性活躍」が推奨されるにもかかわらず、賃金や昇進昇格における男女格差はなかなか解消されない。

初任給における男女差はなくなったが、その後、男性の賃金は右肩上がり。ところが女性は30代半ばくらいから横ばいである。寿退職は姿を消したが、出産や育児のため、あるいは夫の転勤に伴う退職は後を絶たない。勤続年数が短いことは昇給

昇進を妨げる。賃金の低さや勤続年数の短さを反映して、女性が受け取る年金額は低くなる。かつて高齢社会をよくする女性の会は、女性の年金に関する要望書を厚生省（当時）に提出している。

高齢女性の貧困問題を解決するには、若い頃からの男性との格差解消が欠かせない。これまでにもしばしば言及されてきたことではあるが、職場における男女格差を是正し、夫の傘の下にあることを前提にした世帯単位の年金制度を個人単位化することが必要である。

最盛期には1600人近くいた会員数は、ほぼ3分の1に減少した。主たる原因は、高齢化による虚弱化や死亡だが、なかには年金生活者になって収入が激減し、会費が払えないからという理由で退会する者もいる。経済的な逼迫は、社会的なネットワークの縮小にもつながりかねない。男女を問わず、ひとりでも、ひとりになっても経済的に不安なく暮らせるような社会の到来を心から願っている。

「情報紙」 助け合いの仕組みづくりをさらに進めよう

『さあ、やろう』 vol.20

生活支援コーディネーターと協議体の取り組みを考える情報紙『さあ、やろう』。

新地域支援事業に携わり、地域における助け合いの仕組みづくりを進めている方々の参考となる記事を掲載し、全国の関係者の皆さんに頒布しています。また、財団ホームページからもダウンロードできます。

【vol.20目次】

- ◆「いきがい・助け合いサミット in 東京」報告
私たちはどこに向かおうとしているのか～サミット提言の骨太な総括～ 堀田力／全体シンポジウムと分科会1～37提言／ポスター展報告／参加者の皆様から寄せられた声／特別提言／「助け合い大全'22」
- ◆特集・対談 地域共生社会と自助・共助
～すべての人が幸せに生きる社会～
宮本太郎氏・堀田力
- ◆連載企画 地域再生への道
- ◆「地域助け合い基金」状況で報告 ほか

財団HPトップページ→「ライブラリー」→「さあ、言おう・さあ、やろう」にお進みください。



vol.18

vol.20

【お問合せ】メール post@sawayakazaidan.or.jp
電話 (03) 5470-7751

新しい ふれあい社会づくりに 向けて

ふれあい

いきがい

助け合い

さわやか福祉財団は、子どもから高齢者まですべての人が、
それぞれの尊厳を尊重しながら、いきがいをもって、
ふれあい、助け合い、共生する地域社会づくりを一貫して進めています。

特に現在は、全国自治体が新地域支援事業で取り組んでいる
住民主体の助け合いの地域づくりを強力に支援しています。

どうぞ、皆様の地域の情報もお寄せください。

● 新地域支援事業・助け合いの地域づくり

北から南から 各地の動き

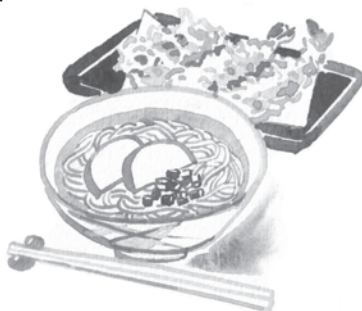
● その他の財団の活動 など

ご支援ありがとうございます。

さわやかパートナー（賛助会員）・

ご寄付者の皆様のご紹介

さわやか活動日記（抄）





新地域支援事業・ 各地の動き

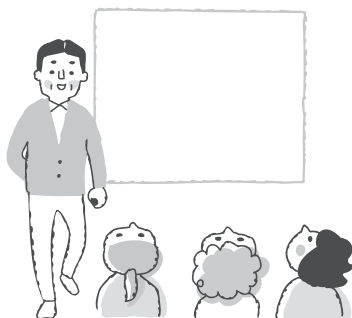
(2022年10月1日～10月31日)

●全国各地で、

推進の支援をしています

●活動の一部を紹介しています

SCⅡ生活支援コーディネーター



住民に参加を呼びかける支援
(住民対象のフォーラムや勉強会の支援等)

尾花沢市(山形県)

22日／尾花沢市で市民フォーラムが財団と共催で開催され、財団の堀田力会長が基調講演とパネルディスカッションのコーディネーターを務めた。3年前に住民向け勉強会を開催し、その後、市民フォーラムを実行する予定だったがコロナ禍となり延期。今年1月と6月にあらためて住民主体の地域づくりを理解するために勉強会を行った。

第1層SCが配置され、協議体はこれから設置するため、財団から実行委員会を提案した。また、勉強会のアンケートでフォーラム実行委員会への参加希望を募り、第1層SCと協議を重ねての開催となった。フォーラム当日の打ち合わせで、「参加者で関心を持った人たちにその後、どのように参加してもらうか」について議論。堀田会長が「面として広げるには2層が必要」

と提案。そこでフォーラムの行政説明では2層協議体についてしっかり説明し、その後の基調講演で堀田会長が助け合いの必要性に加えて協議体への参加を呼びかけた。パネルディスカッションは地区住民全戸参加で案山子作りをきっかけに繋がりがりづくりをしている地縁の実践、空き家を活用した居場所の実践、同県天童市のさわやかインストラクター加藤由紀子氏から有償ボランティアの実践がそれぞれ報告され、それぞれの取り組みの楽しさや温かさ伝わるパネルとなった。アンケート記入者41名を、2層づくりをはじめ今後どう生かしていくか、第1層SCは行政と連携しながら検討を進めている。

(鶴山)

川島町(埼玉県)

16日／川島町の小見野地区住民勉強会で当財団が講師を務めた。住民参加者約50名。同地区の第2層協議体「おみの支援隊」(11名)が、当地区の主たる地縁関係者に助け合いへの理解を促

し、協議体の活動周知を目指して企画したもの。設営や備品準備等でSCの支援は受けたものの、集客から運営まで「おみの支援隊」が行った。

参加したくなる要素も入れようと、住民のボランティア団体によるウクレレ演奏を冒頭に盛り込むなど、住民目線での協議体の話し合いが企画に生かされていた。

20分ほどの財団の講義に続き、現状の課題（課題がない場合は将来を考えたとときに課題となること）、その課題を解決するために必要な活動について話し合い、発表で共有した。

発表では、課題として身体的・健康的不安のほか、鉄道駅がない町であることから買い物や通院も含む移動手段、水害が多い町であることから災害への不安、農作業に従事している人が多い地区でもあり畑や農機具の管理などが出されていた。地域にあったらいい活動として、移動販売、ネットスーパーの活用、近隣同士のつながりをつくる

ための活動、集落の話し合いの場、集落単位での乗り捨て用の自転車、既存のデマンドタクシーの活用、「やってほしい」と「やってあげるよ」をつなぐシステムづくりなどが挙げられた。

最後に山田一志SCが、SCの役割について紹介し、ぜひ一緒に助け合いを広げていこうと呼びかけた。コロナ禍で活動が止まっていた「おみの支援隊」だが、今回の勉強会を機に地域に助け合いの理解を促し、新たな協力を得て再スタートを切る。（岡野）

印西市（千葉県）

15日／印西市第3回市民フォーラム「ともに助け合う地域づくり」が開催され、当財団が講演を行った。参加者約50名。同市は人口約10万人、千葉ニュータウンを有する都市で子育て世帯の新住民の移住が多い地域もあれば、昔ながらの風景が残る地域もあり、地域差が大きい。SCは地域の特徴を考慮しながら住民に働きかけ、こうしたフォーラム等によって助け合いの気持ち

を醸成して助け合いの地域づくりを進めている。

講演では、助け合いの必要性や助け合いを進めるための生活支援体制整備事業であることを話し、協議体の活動事例や、各地の助け合いの事例も紹介し、私たちにできることで支え合い、安心して暮らせる地域をつくろうと呼びかけた。

講演に続き、同市第1層SC沼崎達氏よりSCの活動事例が報告された。報告には、第2層SC森敬子氏、小林みゆき氏、入江恵美氏も参加。第1層・第2層SCが協力して作成した動画を2本紹介。住民が地域のために活動したいとSCに相談し、地域ワークショップに参加することで、地域の困りごとや自分に何ができるかを考える内容で、この日の参加者にもワークショップへの参加を促す内容だった。

動画紹介後に沼崎SCから、ワークショップを行ったことで地域単位のフォーラム開催に至った事例等が紹介さ

れた。「次は地域に入り、ぜひ皆さんと一緒に考えていきたい。地域づくりを相談してほしい」と締めくくった。

アンケートは、協力したいと考えた人が連絡先を記入するようになっており、SCから今後予定されている生活支援サポーター養成講座なども案内する。同市の今後に期待したい。(岡野)

鳥取市(鳥取県)

7日／あらゆる人権課題の解決を目指して、実践と交流の輪を広げることを目指とした市民集会在「とりぎん文化会館」で開催された。「人権尊重社会を実現する鳥取市民集会」と題された本会は、同市人権教育協議会が主催して今回で48回目を迎える。昨年はコロナ禍で中止になったが、今回は「すべての市民の人権が尊重される鳥取市を創造しよう／互いに気付き、支え合える地域づくりを」をテーマに、一般社団法人ヤングケアラー協会代表の宮崎成悟氏による基調講演と7つの分科会で構成された。

当財団は分科会の一つ「みんなであつくる地域の助け合い」を担当、フラットな関係性による助け合いの重要性を説明し、助け合い体験ゲームとグループワークを行った。発表では少し時間を超過するなど、参加者の前向きな様子が印象的な集会となった。(高橋)

SC研修・情報交換会等に協力

福島県

12日／福島県南管内の令和4年度生活支援コーディネーター情報交換会で、当財団が講話とグループワークで協力した。県内市町村から16名が参加。

講話は、事前の調査票で参加者からの現在の課題を集約。主な課題として挙げられた担い手養成、SCの業務負担、協議体の運営等に参考になる事例を紹介しながら進めた。グループワークでは、各自の取り組みやアドバイスをもらいたい課題を共有し、課題に対する解決策について話し合った。内容は全体発表で共有した。

グループワークで話し合われた主な内容と解決策は次の通り。①協議体の主体性がない↓メンバーの入れ替え、成功事例の共有、勉強会実施。②担い手不足↓老人クラブや大づかみ勉強会の参加者など、助け合いに理解のある住民に対する働きかけ。③協議体の周知↓広報誌作成、フードバンク等とのタイアップ企画、社会福祉協議会・行政など関連部署との連携等。

コロナ禍だったため久しぶりの集合形式での情報交換となり、活発に意見交換が行われた。互いの意見が参考となったのはもちろんのこと、あらためてSC同士のつながりづくりにもなったようだった。(岡野)

山梨県

25日／山梨県のさわやかインストラクターが企画・運営したSC情報交換会が開催された。参加者は県内8市町の行政・社協、さわやかインストラクター、県、当財団で18名。今回は国仲地区で実施、11月には郡内地区と、県内

2地区に分けて実施する。助け合い推進パートナーである南アルプス市SC

の斉藤節子氏、小林陽一氏も企画から携わっており、この日も参加した。塚田好子インストラクターからのあいさつと趣旨説明の後、参加者全員が自己

紹介し、市町ごとに取り組みや課題（悩み）を話し、それに対して全体で情報交換した。適度な人数で、グループ分けをせず皆の顔が見えるように、テーブルは円形に並べた。話しやすい雰囲気だったためか、かなり具体的な

課題やそれに対しての多様な手法や考え方などを意見交換できた様子だった。

今回の情報交換会は、ゆるやかなネットワークをつくり、来年度にもつながるようにすることを狙いとした。参加者は名刺交換も自主的に行っており、顔がつながり、意見交換したことで連絡もしやすくなったようだ。11月の郡内地区も県と財団がバックアップしながら、市町村やSCらのネットワークづくりを共に推進していきたい。

静岡県

（鶴山、沼上）

27日／さわやかインストラクター静岡県ブロック主催のSC情報交換会が初めて開催された。参加者は行政職員4名を含む38名。

一般社団法人コミュニティネットハピネス代表理事の土屋幸巳氏、同県函南町社協の中村美那子氏、同県長寿政策課の古澤尚之氏による鼎談の後、東京サミットのポスター展から、西伊豆町、藤枝市の事例が紹介された。

グループワークは6グループに分かれて、テーマを特に決めず、SCの悩みやうれしかったこと等を本音で語り合った。各グループに助け合い推進パートナーやオプザーバーが入り話し合いをリード。最後にグループごとに決意表明をA4の紙に記載し、皆で見えて回った。研修参加の感想も裏面に記載した。

主な感想は、「このような情報交換会の場合があってありがたい」「フリー

トークが楽しかった」「久しぶりの対面はリモートの何倍も価値がある」「次回もぜひ開催してほしい」など。

主な決意表明は、「できることから少しずつ、明日からさらに地域に入る」「事業のこと、SCの役割をまずは把握する」「悩みは共通だからこそ、他市町の意見を聞こう」「困りごとは『ない』という方はいないと思うので、寄り添うことを大切にしていきたい」「SCは醍醐味だ。楽しめるときが来るぞ！」など。

今年度内にもう1回開催する予定で、財団も引き続き支援する。（澤）

サロン情報交換会に協力

三春町（福島県）

19日／三春町「つながっぺ！みはる」地区サロン情報交換会が町営体育館で開催され、当財団が講師として参加した。サロン継続のためのモチベーションアップと、お互いのサロンからヒントを得るための場として町が企画した

もので、参加者約100名。

同町では昨年の町民フォーラム後、町内全地域を対象として住民勉強会を行ったことから、やる気のある住民によるワーキンググループが立ち上がり、それぞれのグループが中心となってサロンを創出した。今回の地区サロン情報交換会は、それらを中心に町内全域から約26のサロンが集まった。司会は第1層SC神山光寿氏が務めた。

財団による講演では「生活支援と居場所」と題して、居場所から助け合う関係性をつくりやすいことや、定期的に顔を合わせる・顔の見える関係性がつくれるなど居場所の特徴を話し、それを生かして実際に居場所で有償ボランティアを行っている事例を紹介した。その後、実践報告として生活支援に取り組んでいるサロン関係者が登壇し、サロンへの送迎、移動販売誘致による買い物支援なども含めた活動が紹介された。

意見交換会には坂本浩之町長も参加



三春町「つながっぺ! みはる」地区サロン情報交換会での坂本町長と参加者の記念撮影（前列右から6人目が坂本町長）

し、今回参加した全サロンの活動に対してそれぞれに特徴や素晴らしい点に

ついて講評した。その後、町長を囲んで全員で記念撮影。活動者にとって非常に励みになったようだ。

その後はポスターセッションによる相互の情報交換会となり、お互いのサロン同士でコラボしたいといった声が上がするなどしていた。

最後にSCから参加者に感想を聞くと、「男性が意外に参加していることが分かり参考になった」「サロンごとにオリジナリティにあふれていた。良いところを取り入れていきたい」「今後もこうした試みを続けてほしい」といった意見が出た。事務局としても、こうした住民同士の情報交換の場はニーズが高いことが分かり、今後も企画を検討していきたいとのこと。必要に応じて支援していきたい。（岡野）

担い手養成研修会に協力

天童市（山形県）

19日／9月に第1回を実施した「天童市住民助け合い活動養成研修会」の2

有償ボランティア勉強会に協力

回目担当財団も協力。最初に天童市社協の宮下知果さんから、1回目の勉強会の振り返りとしてみんなで話し合った「目指す地域像」などが報告された。

その後、「理想の地域を実現するために、自分が今できることは何か考えてみよう」と題してグループワークを実施。「目指す地域像」を実現するために何ができるか、助け合い体験ゲームを実施し、気づいたことについて話し合い共有した。その後、同県内のさわやかインストラクターでNPO法人ふれあい天童理事長の加藤由紀子氏と財団から、「目指す地域像」の中でもニーズの多かった居場所、有償ボランティア、助け合いの移動支援についての基本を講義した。10月18日・11月11日に市内2か所の助け合い活動現場で体験学習会を実施しており、この養成研修会参加者は希望により体験できる。

12月に開催する3回目では、自分がやってみたい取り組みごとに分かれて話し合う予定。

(鶴山)

鹿屋市（鹿児島県）

31日／SCと協議体が働きかけ、市内に有償ボランティアや居場所など5団体が立ち上がっている鹿屋市で、さらに有償ボランティアを立ち上げ広げるための仕掛けをと、SCと行政が一緒に企画した勉強会の1回目が開催された。同市の生活支援体制整備アドバイザーでもあるさわやかインストラクター齋藤鈴子氏が相談に乗りながら、当財団も連携、同県内のインストラクター瀬戸三保氏、富永泰子氏も参加協力しての開催で、同県南さつま市や東串良町のSCにも参加した。

主催者である同市地域包括支援センターの森ゆかり次長があいさつ・趣旨説明。基調講演として財団の清水肇子理事長が助け合いの必要性と有償ボランティアについて基本を伝えた。続いて、同市内で活動を実践する「寿三丁目きばいもんそ会」「大浦おたすけ隊」

が事例発表。参加者は大変熱心で具体的な質問がたくさん上がり、予定時間をはるかにオーバーするほどのやり取りとなった。SCからは研修会の企画の中で、地区ごとに関心のある人に声をかけて周知しようで、地区ごとのテーブルを設けて基調講演や事例で学び、その後の助け合い体験ゲームでは地域をバラバラにしての交流・意見交換を行った。

参加者から、活動を立ち上げてみようという声も上がったとのこと、
「仕掛けをしてよかった」との実感を持ったSCからは、今後2回目を企画していく。

(鶴山)

地域支援合い活動推進研修会に協力

富山市（富山県）

24日／富山市内の地区社協、自治振興会、包括、地域連絡会関係者等を対象に「地域支援合い活動推進研修会」が開催され、当財団も協力した。本研修会は同市社協主催で、住民相互の支え

合い活動推進を目的に毎年、生活支援体制整備事業の一環として開催されている。

昨年度までは「居場所づくり」を切り口に助け合いを考えてきていたが、今回は居場所だけでなく生活支援全般に目を向けた活動づくりをテーマとした。財団からの「住民主体の地域づくり」の説明に続き、市内の取り組み3事例が紹介された。同一プログラムを午前と午後の2回開催し、コロナの中でも参加しやすい環境が用意されていた。

(高橋)

協議体の活動・編成等に協力

美里町（埼玉県）

6日／美里町東児玉地区で2回目の住民勉強会が開催された。参加者17名。計3回の勉強会を実施し、希望者で第2層協議体を立ち上げる予定。SCから1回目の振り返りを行い、助け合いの大切さについて当財団より講義を行った後、グループワークを行った。「10

年後を考えたときに不安に思うこと」「その課題を解決するために必要な活動」について話し合ってもらい、地域で安心して暮らしていくために助け合いが必要であること、自分たちでもできる助け合い活動があることに気づきを得てもらうことを狙いとした。

発表では、移動販売の誘致、近隣同士での話し相手や見守り、お互いに見えることをして支え合う仕組みづくり等が挙げられ、助け合い活動の必要性への認識が高まったようだった。

20日／美里町東児玉地区で3回目の住民勉強会が開催された。参加者19名。SCから、2回目に挙げられた地域課題とそれを解決するために必要な活動を共有した。その後、財団からなぜ助け合いが必要かについて簡単に講義し、グループワークを行った。

グループワークでは、2回目で話し合った地域をより良くするための活動の内容をさらに具体的に話し合ってもらった。「体操など地域の人が集まり

やすい活動を行うサロンを開催する」「地域の集いの場に出てきてもらい、そこからつながりをつくる。そこで困りごとなどを聞けるコミュニティをつくる」「集まりに來られない人もいるので、アンケートで得意なことを聞き取り、ポイント制の有償ボランティアを行う」といった活動案が発表された。

今回で勉強会は終了。今後、協議体を立ち上げて活動の具体化のために話し合いを継続していきたいので、ぜひ参加してほしいとSCが呼びかけた。

協議体への参加確認のアンケートで、ぜひ参加したいと回答した人を中心にメンバーを検討し、11月中旬に第2層協議体を発足する予定。

(岡野)

犬山市（愛知県）

29日／犬山市で第2層の連絡会が開催され、当財団も情報提供等で協力した。この企画は年に1回、市内全圏域の第2層協議体の構成員が集まり、これまでの活動報告を行うもの。互いに協議体の進め方のヒントを得るほか、制度

振り返りなどの情報提供で役割を確認する機会としている。

今回は、買い物支援や屋外サロンなど具体的な活動の創出が報告され、協議体の継続的な活動の重要性を共有することができた。構成員の前向きな姿に、今後のさらなる発展の可能性を感じた。

(長瀬)

阿久比町（愛知県）

31日／阿久比町で第2層協議体の編成を目的とした住民向けの説明会が開催され、当財団も情報提供等で協力した。これまで関係者間で調整を図りながら、地域へのヒアリングなど開催に向けた準備を丁寧に進めてきた。会場では、参加者から前向きな意見も出された。

会の最後にアンケートを実施。その結果、今回2圏域で協議体発足が決まった。住民主体に向けた同町の取り組みに期待がかかる。

(長瀬)

羽咋市（石川県）

12日／羽咋市では、各圏域で住民勉強会を開催しながら第2層協議体を編成

してきており、今回は「羽咋地区の支え合いを考える会」の3回目が開催され、当財団も協力した。羽咋地区は市内最大の規模となる圏域で、丁寧に進めていきたい意向もあり、住民懇談会は全4回実施した上で協議体の発足につなげていく考え。

今回は主に「地域の困りごとの共有と対応」について話し合わせ、次の4回目では希望者を募り協議体を編成する予定。

(高橋)

越前町（福井県）

4日／越前町では今年度より第2層協議体の編成に取り組んでおり、まずはモデル地区となる「城崎地区」で協議体準備会（住民勉強会）を継続開催してきており、当財団も支援している。

今回は最終回となる3回目で、「自分たちでできること」「どんな人を協議体に入れていくか」を話し合った。最後にアンケートで協議体への参加意向上を確認、手上げた住民を中心に早期に協議体を発足させる予定。

(高橋)

アドバイザー派遣事業に協力

湯河原町（神奈川県）

4日／神奈川県によるアドバイザー派遣事業として、協議体向け勉強会の1回目に参加者が協力。参加者は第1層SCと第1層協議体委員（民生児童委員協議会、シルバー人材センター、包括、NPO法人、デイサービス行政担当者）。これまで協議体会議を重ねてきたが、戦略的な地域への働きかけになつていないという課題もあり、まずはSCと「目指す地域像」を話し合うことから始め、共通理解を持ち、住民に働きかける動きにつなげていこうと2回の勉強会を企画している。

最初に第1層SC野田美恵子氏による町の現状説明の後、財団から新地域支援事業の意義と多様な助け合い活動の事例を紹介し、5年後10年後の目指す地域像について講義。グループワークで「目指す地域像」について話し合った。

参加者アンケートには、「多くの意見を集めるために町民の参加や地域の会合単位でワークショップができるとうい」「協議体にもう少しメンバーを増やしたほうがよい」といった意見があり、今後の動きに期待が持てる。

2回目は11月に実施予定。財団からSC・協議体の役割、住民への働きかけについて事例を紹介しながら講義する予定だが、助け合い体験ゲームのリスクエストもあり、市、県と打ち合わせをしながら進めていく。（鶴山、沼上）

市川三郷町（山梨県）

5日／昨年度から山梨県のアドバイザー派遣事業で当財団が支援している市川三郷町と、オンラインで打ち合わせを行った。参加者は、行政、SC、県担当者、財団。

昨年度、第1層の協議体の勉強会を行ったが、今年度は動き出そうと、やる気のある地区をモデルとした第3層協議体設置に向けて住民向け説明会を3回実施。少しずつ参加者が増えてき

た状況を共有した。皆前向きで、SCは手応えを感じているとのこと。

協議体設置後に上がってくる生活課題に、行政が住民の声を聞いて対応するためには庁内連携が必要である。そこで、11月には行政の全担当課・社協の局長・リーダー向けに生活支援体制整備事業研修会を行うことになった。

まずは行政やSCから、人口減少や担い手不足、資源問題等について説明を行い、何のためにこの研修を行うことにしたのか、これまでどのような取り組みをしてきたのかを伝える。その上で財団が、なぜ住民主体が必要なのかについて事例を交えて講義を行うことになった。（鶴山、沼上）

田上町（新潟県）

26日／新潟県のアドバイザー派遣事業として、田上町の勉強会打ち合わせを田上町第1層SCの渡辺綾子氏と高橋知似氏、および同県庁の吉原一步氏とオンラインで行った。

田上町はこれまで第1層SCと協議

体で議論を重ね、有償ボランティアの創出を検討してきたが、そもそも協議体の役割や目指す地域像についての共通理解の不足に気づき、1月から3回の勉強会を行うことになった。その後、来年度はSCと協議体を中心となって住民に働きかける動きをしていこうという具体的な計画を共有し、議論した。コロナ禍で停滞した時期もあったが、必要性を共有して、さらに理解者を広げながらの動きが始まる。（鶴山）

与謝野町（京都府）

20日／与謝野町から、住民向けの生活支援体制整備事業研修会について相談があり、京都府のアドバイザー派遣事業として当財団が協力した。同町では、コロナ禍で事業がなかなか進められない状況だった。この研修会も、2018年度から年度ごとに社協の取り組みを報告するなどの内容で企画されていたが、コロナの影響で2年間、住民向けの研修会ができない状況が続いていた。

今回の研修会の目的は、高齢者世帯や認知症高齢者の増加、核家族化や孤立化等の問題が多様化・複雑化している中でも、暮らし慣れた町で生活を続けるために地域で支え合う「地域の支え合い活動」について知識を深め、さまざまな『わ』を広げていくこと。

町社協からの現状報告等につき、財団から「生活支援体制整備事業についてくなぜいま助け合いが必要なのか」として講義を行った。高齢者人口の推移や、なぜ今支え合い活動が必要なのか、地域の助け合いの手を増やすコツ、お互い様の支え合いをつくる話し合いの場が協議体であること、これからの高齢者支援は町のみんなで行うこと等を伝え、協議体の話し合いから創出された移動支援など活動創出事例を紹介した。実践報告では、京都府宮津市第2層SCから「生活支援サービス研究会」（協議体）が毎月SC会議や勉強会を継続していること等が紹介され、アンケートや居場所、移動支援など具

体的な活動も紹介された。

終了後のアンケートでは、40名が次回各地区（3地区）で行う予定の勉強会に参加してもよいと回答した。その場で社協・行政と打ち合わせを行い、参加者の熱い思いが冷めないうちに年内に2回目の研修会を行い、今年度中に第2層協議体ができるように進めていく。引き続き、協議体の基盤づくりをフォローしていく。（篠原、目崎）

北中城村（沖縄県）

28日／沖縄県介護保険広域連合の生活支援体制整備アドバイザー派遣事業に当財団が協力している。

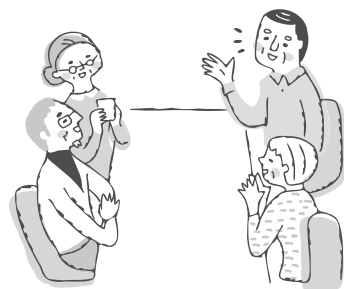
今回は北中城村と意見交換を実施。第2層協議体の設置など今後の進め方を関係者と共に協議した。村内で地域活動に関わる住民は多いという情報も出されるなど、今後の助け合いの創出を期待しつつも、まずは協議体設置に向けた準備を進めていく。（長瀬）

宜野座村（沖縄県）

27日／沖縄県介護保険広域連合の生活

支援体制整備アドバイザー派遣事業に当財団が協力している。

これまで財団で行った広域連合の研究からの流れで、推進モデルとなる取り組みを進める。初回となる今回は、宜野座村の関係者と意見交換を実施。今後の戦略を具体化するにあたり、村の地域性やこれまでの取り組みの経緯のほか、今後構築すべき関係者の連携体制など幅広い協議を行うことができた。今後も広域連合と共に、定期的な協議を行うことを確認した。（長瀬）



（本稿は、岡野貴代、澤美杉、篠原徹、高橋望、鶴山芳子、長瀬純治、沼上悦子、目崎智恵子）

ご支援ありがとうございます。

さわやかパートナーは、本財団の趣旨にご賛同いただき、財政的・精神的にご支援くださる賛助会員の皆様です。会費は寄付金の一種として大切に活用させていただきます。新規ご入会の会員の方、会員をご継続いただきました皆様も毎号ご紹介いたします。また、個別のご寄付をいただきました皆様もご紹介させていただきます。

(敬称略) (2022年10月1日～10月31日財団受付分) ※なお、自動振替の場合等、処理日と財団受付日にずれが出て掲載時期がずれる場合がありますご了承ください。

さわやかパートナー個人 (43件)

(都道府県別50音順)

北海道	大山 真人	高野 利雄
澤出 桃姫子	佐藤 実以子	高橋 清美
宮城県	滝口 由美子	竹下 知道
荒川 陽子	千葉 豊	原 勝則
須藤 わか	関川 和歌子	本間 達三
秋田県	山田 明美	本谷 喜美子
伊藤 和喜	東京都	神奈川県
福島県	天野 寛子	大久保 寧緒
緑川 宏子	石川 正三	西原 久夫
茨城県	鏡 英仁	登 輝夫
林 修	川田 有一	平田 行雄
林 美代子	神原 正子	藤井 衛
埼玉県	神部 亜季	長野県
海老原 邦延	仙崎 礼次郎	福沢 千恵子

岐阜県

三輪 正善

京都府

海来 美鶴

神谷 賢蔵

初田 隆史

山口県

福森 宏昌

徳島県

山本 博子

福岡県

岡本 えり子

橋下 京子

蒔田 加代

長崎県

坂本 正樹

鹿児島県

鹿兒島県

さわやかパートナー法人 (10件)

(50音順)

川崎信用金庫
サントリーホールディングス株式会社
スミセイ保険サービス株式会社
公益財団法人生命保険文化センター
一般社団法人全国労働金庫協会
全国労働者共済生活協同組合連合会
新潟県労働金庫
NPO法人寝屋川あいの会

一般ご寄付 (2件)

パラマウントベッドホールディングス株式会社
社会福祉法人矢祭町社会福祉協議会

秋元 紀子 (1万円)

(50音順)

一般社団法人日本メンズファッション協会
(5万2586円)

子ども・子育て市民委員会ご寄付 (5件)

(ご寄付日付順)

佐藤 真智子 (1万円)
小田 和夫 (3千円)
小田 幸子 (3千円)
草島 佳子 (3千円)
吉岡 高志 (3万円)

さわやか活動日記(抄)

〈2022年10月1日～10月31日〉

情報・調査事業

調査政策提言
プロジェクト

中間報告と 今後について 意見交換

(厚労省地域づくり
加速化事業)

(10月17日)

地域づくり加速化事業・介護予防普及展開事業 合同委員会が開催された。本誌10月号等で報告してきた地域

づくり加速化事業の委員と、介護予防の普及啓発強化を目的とした介護予防普及事業の委員が顔を合わせ、それぞれの事業の中間報告と今後の方向性について意見交換する機会となった。

両事業は全国市町村の伴走支援をしており、その取り組みについてもアドバイザーの各委員から報告があり、状況や課題なども共有した。また、1・地域全体からみる課題と、個

別の取り組みからみる課題として、どのような支援・仕掛けが必要か ①地域全体での取り組みの必要性への気づき、②個別の取り組みの課題への気づき

2・専門職の関与や確保・人材不足に課題を持つ市町村に対し、継続的に専門職と協働できる体制を整えるためにどのような方法があるかをテーマに、今後の展開に向けて意見交換を行った。

当財団からは、地域全体での取り組みの必要性への気づきとして「各地での伴走支援の報告をうかがい、地域づくりはサービスづくりではないこと。住民が主体的に参加してこ

ご支援をいつもありがとうございます
今年もさわやかパートナーにお贈りしました

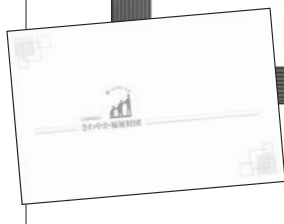
さわやかの友

これまで長い間、新しいふれあい社会づくりを
あなたと一緒にやってこられたことをとても
誇りに思っています

令和4年 11月

さわやか福祉財団
代表 藤田 力
理事長 清原 孝子

さわやかパートナーとして20年間、ご支援くださいました皆様へ、心ばかりですが永年のご支援に対する感謝状をお贈りさせていただきます。今後も、新しいふれあい社会づくりを、新しうって進めてまいります。どうぞ引き続き活動をお見守りください。ありがとうございます、ご支援をよろしく、お願い申し上げます。



そ地域づくりになる。
暮らしのベースがあり、
その上に総合事業のサ
ービスがある。まずは
住民の声を聞く。周知
は住民から住民への働
きかけが有効」という
ことと、「都道府県、
厚生局の役割としてモ
デル的な事例の情報収
集と発信。例えば、多
様な事例の情報交換の
機会をつくる。地域づ

くりの多様なプロセス
では成功と失敗（壁）
がある。プロセスごと
の成功事例と壁をどう
乗り越えたかのプロセ
スモデルも重要」とい
うことを意見した。
多様な委員の意見を
今後の各市町村への伴
走支援や全国研修、ブ
ロック別研修などに生
かしながら取り組みを
進めていく。（鶴山）

事務所 だより

●子ども・子育てのシンポジウムも無
事に終わり、今年も残すところ1か月
を切った。慌ただしい年末に、大掃除
とまではいかないが、少しでも財団事務所内
をきれいに、新しい年を迎えたいもので
すね。「いきがい・助け合いサミット in 東
京」をはじめいろいろなイベントにご参加い
ただいた皆様、財団をご支援くださっている
皆様、来年もどうぞよろしくお願いします。

私たちと一緒に、地域共生社会をつくりましょう！ さわやか福祉財団の活動をご支援ください

さわやか パートナー （賛助会員）

当財団は、誰もが安心して暮らせる地域共生社会をつくる
ために活動しています。さわやかパートナーとして、ご支
援をよろしくお願いいたします。

個人会員、企業・団体等の法人会員として、どなたでもお申
し込みいただけます。

◎詳しくは、36ページをご参照ください。

地域助け合い 基金

生活に困りごとを抱える方々を助ける市民活動団体・個人
に活動資金を提供する、地域共生社会実現のための基金です。

◎詳しくは、下記の財団ホームページからご確認ください。

<https://www.sawayakazaidan.or.jp/community-fund/>

子ども・子育て 市民委員会

すべての子どもが健やかに育つよう、社会全体で支援する
総合支援システム実現のために活動しています。

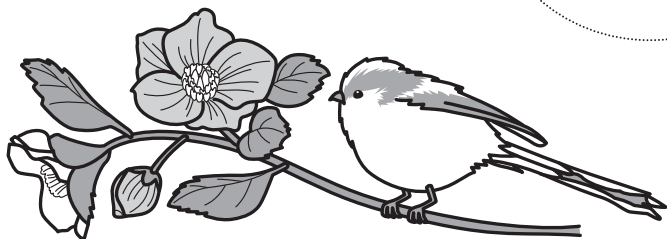
◎ご賛同・ご寄付は、同委員会ホームページからお願いいたします。

【ホームページアドレス】<https://www.kodomokosodate.jp>

ご寄付には、税制優遇措置もあります。詳しくは、当財団ホームページのご寄付に関する
ページ（<https://www.sawayakazaidan.or.jp/partner/>）をご覧ください。

【お問い合わせ】電話 (03)5470-7751 メール mail@sawayakazaidan.or.jp

みんなの広場



歳を取ることに
身につまされま

高嶋 宏臣さん 83歳

兵庫県

10月号を読みました。袖井孝子さんのエッセイ「歳を取るということ」には、全く身につまされます。私も入院、手術を受けるときに、保証人として妻のほかに息子の名前も書かされました。

また、2年前に屋内のガス工事をする際にも、妻と息子の両方に保証人として書かされましたが、息子に工事業者から電話したとき意見の相違があり、その工事は取りやめになりました。そして今年になって、息子の紹介で新たな業者に工事をしてもらいました。

投資は私も20年近くやっています
が、今のところ息子について聞かれ

投稿募集

『さあ、言おう』は皆様の声を社会
につなげる問題提起型情報誌です。
ぜひ皆様の声をお寄せください。

〒105-0011 東京都港区芝公園2-6-8
日本女子会館7階
公益財団法人さわやか福祉財団
『さあ、言おう』編集部宛
FAX: (03) 5470-7755
E-mail: pr@sawayakazaidan.or.jp

送
付
先



たことはありません。ただし、毎年
のように担当者の上司が応接室に来
られて、私の身の確認のような質問
をされています。

これまでのご投稿、大変勉強にな
りました。今月号から清水理事長が
コメントしてくれます。

一人暮らし高齢者も増えていく中、
どんなやり方がよいのか、皆で意見
を出し合いましょう！



『さぁ、言おう』はみんなで新しい社会のあり方を考える問題提起型の情報誌です

■さわやか福祉財団の活動をさわやかパートナーとしてご支援ください。

『さぁ、言おう』を毎月お手元にお届けいたします。

さわやかパートナーは、さわやか福祉財団の理念と活動に共感して会員としてご支援いただく賛助協力者の皆さんです。

個人
年会費

Aコース 10,000円

Bコース 3,000円

法人
年会費
(1口)

Aコース 100,000円

Bコース 20,000円

公益財団法人さわやか福祉財団の会費は、特別な特典を付与するものではない賛助会費であり、寄付金の一つの形です。

■寄付金は税金の優遇措置が受けられます。

さわやか福祉財団へのご寄付は、所得税、法人税等の優遇措置が受けられます（さわやか福祉財団は所得税の税額控除対象の公益法人です）。

一般ご寄付を
いただく場合の
お振込口座

口座名義：公益財団法人さわやか福祉財団

郵便払込 00120-9-668856※

三井住友銀行 浜松町支店 普通預金 口座番号2754574

みずほ銀行 浜松町支店 普通預金 口座番号3383326

三菱UFJ銀行 浜松町支店 普通預金 口座番号3731714

りそな銀行 芝支店 普通預金 口座番号1174297

※払込手数料不要の郵便払込取扱票をご用意していますので、お申し出いただければ郵送いたします。

*お問い合わせは、編集部あるいは社会支援促進チームまでお気軽にご連絡ください。
電話 (03) 5470-7751 メール mail@sawayakazaidan.or.jp

表紙絵から はり絵・池田げんえい

「スノーマンとクリスマス」



編集後記 ●A I や I C T の活用が、みんなの出番と出会いを広げてくれる時代になりました（P2～「新しいふれあい社会実現への道」）。●「活動の現場から」は奈良県葛城市。住民の熱意とSCの支援で、住民主体の移動支援を創出しました（P4～）。●高齢女性の貧困問題、解決の道はまだ遠いようです（P18～「人生100年時代を生き抜く知恵」）。●東京サミットの提言編が出来上がりました！ パネル編、ポスター編と併せてご活用ください。12月28日まで、財団ホームページで動画配信等も行っています（表紙裏）。

助け合いを
広げよう!



小野 晶子



- 独立行政法人労働政策研究・研修機構
副統括研究員
腰痛、首痛に悩んで筋トレを始めました。
スマホ首、猫背が徐々に改善!『企業で働く人
のボランティアと社会貢献活動:パラレルキャ
リアの可能性』公表に向け執筆中。

いつも相談に乗ってくれていた先輩が、

「ただ（無償）の仕事、一生懸命やった方がいいよ」

とアドバイスをくれたことがある。

しばらくたって、金銭以外での関係でつなぐ大切さ、

そして、その関係の方が強い事がわかった。

さあ、12月号

通巻352号 2022年12月10日発行
(毎月1回10日発行)

表紙絵 池田げんえい
イラスト すずきひさこ
福島康子

レイアウト 菊池ゆかり

印刷所 日本印刷株式会社

発行人 清水肇子
発行元 公益財団法人さわか福祉財団
〒105-0011
東京都港区芝公園2-6-8 日本女子会館7階
Tel (03)5470-7751 Fax (03)5470-7755
E-mail pr@sawayakazaidan.or.jp
<https://www.sawayakazaidan.or.jp>
Printed in Japan

無断複写・無断転載はご遠慮ください©

助け合いの地域づくりに、 当財団のツールをぜひご活用ください

当財団HPトップページ「ライブラリー」→「各種広報ツール」から無料でダウンロードもできます。「新・助け合い体験ゲーム」は1,100円（税込・送料別）となります。

いつでも誰でも行ける場所を 広げよう！ 居場所ガイドブック

地域での絆を深め、助け合う関係を広げるための共生型常設型居場所の実践ガイドブックです。



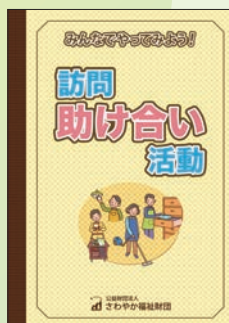
地域シニアが子どもたちと共に遊ぶ ともあそびへのおさそい 「どう遊ぶ？」QA

子どもたちを地域のみんで育てましょう。地域シニアと子どもたちが共に遊ぶために役立ててください。



みんなでやってみよう！ 訪問助け合い活動

家の中で行われる、主に高齢者の助け合い活動について詳しく解説しています。講師用解説書もあります。



新・助け合い体験ゲーム

地域のお互いさまの助け合いにおけるニーズと担い手の発掘が体験できます。研修等のアイスブレイクにも効果的。



【お問い合わせ・お申し込み】

電話 (03) 5470-7751 メール mail@sawayakazaidan.or.jp